

## 広い視野と的確な洞察

堤 清 二一

はじめてお目にかかったのは、先生が代議士になられてからそれほど経っていない頃だった。当時、衆議院に籍を持っていた父から会社の事務所に電話がかかってくる、「これからお前の店に行かれるから」と先生の名前を告げた。間もなく、人の気配を感じて読んでいた書類から眼をあげると、そこに先生が無言で立っておられて、私はあわてた。その頃、私の事務所は池袋駅の傍の木造二階建小屋の片隅にあって、受付も秘書嬢もいなかったのである。その時の話の内容は、クラリー金銭登録機のことか何かだったと思う。用件は記憶に定かではないが、先生の印象は今でも極めて鮮明である。

それから大分経って、池田内閣の官房長官に就任された頃から、お目にかかる機会も多くなった。末広会という財界人が作っている会に、先輩のお引きまわしで参加したり、比較的若い経営者が集まって先生の話をうかがう会もできた。大雄会がこれである。従って先生の晩年の十三、四年は、比較的醫咳に接することが多かった。

三年ほど前であったが、ソ連との貿易に関連して、これは先生のご意見をうかがってからにしようと思つ計画があつて、お訪ねした時のことだ。「ソ連は周囲から攻めこまれる危険ということを、いつも考えている国だ」と先生はいわれた。革命直後、日本も含めて周囲の国が侵入した歴史が先生の頭のなかにあるようだった。「日本人にはソ連嫌が多いが、いやだからといってお互いに引越すわけにはいかないから、政府としては動きにくいことも多いので、民間で細い流れがいくつもできていくてくれることはありがたいね。いいことだと思ふな」と

も励まして下さった。

西武美術館でエジプトからツタンカーメンを持ってきたい、という話が起つたさいも、私は先生に教えてもらいに行った。アメリカとエジプト、エジプトとイスラエル、エジプトとシリア、イラク等々、中近東諸国をめぐる複雑な情勢を、先生は私にも分かるように話して下さった。私は先生が常に幅広い情報を集め、床屋政談的な、ただ俗耳に勇ましく聞えるだけの浅い議論を超えて、世界の動きに的確な分析と洞察力を欠かすことがなかったのを知っている。

お邪魔すると、いつも先生が腰を下す椅子の傍には十数冊の本が積み、丹念に眼を通しておられる姿にぶつかつた。総理になる前、「日本の政治風土では、あまり本を読むと総理になれないという意見がありますから、気をつけて下さい」などと、違ふ世界に住んでいる後輩の気易さで愚見を述べたことがある。「そうかね、これはもう習性みたいなものでね」と、その時、先生は苦笑していた。これは私事にわたつて恐縮だけれども、私がある雑誌に連載した作品が本になったのを、「北海道に遊説に行く飛行機のなかで読んだ」といわれて大変驚いたことがある。「君は商売間違えたんじゃないかね」と、その時はからかわれた。私が自分の文学作品について政治家から感想をうかがつたのは先生だけであつた。

そんな具合だつたから、最後に私邸にお邪魔した時、私はその頃読んで啓発された中村雄二郎氏の『知の変貌』という哲学の本を献呈したのを覚えていゝる。西歐的な知のゆきづまりを、欧米の人がどう受けとめ、そうした文脈のなかで日本を見る眼が、政治の面でも経済の面でも変わつてきているように思われる点について、生意気なことでも申し上げた。先生は、おそらくお読みになる時間が、もうその頃は肉体的にもなかつたのではないかと今になって思う。長い間、慣れ親しむことのできた後輩の一人として寂寞の感にたえない。(西武百貨店会長)